

ナルニア国物語

魔術師のおい

3

C・S・ルイス

土屋京子・訳

玉樹庵・画

(光文社古典新訳文庫刊)

第3話 ディゴリーとアンドリュー伯父(前編)





ポリー!

さわっっちゃ
だめだ!









あの子は
この世界から
いなくなった

——消えたのだ

実験が
成功したのだ

ポリーに
何を
したんです？

送り
出したのだよ

—別の場所へ

…まあ

いわば

……それ

どういう
ことですか？



キッ

…そうだな

ぜんぶ話して
聞かせてやろう

おまえは
ルフエイ
ばあさんの名を
聞いたことが
あるかね？

大伯母さんか
何かじゃ
ありませんか？

ちよつと
ちがうな

ルフェイ
ばあさんは
わたしの
名付け親だ



ほれ



その壁に
かかっているのが
ルフェイ
ばあさんだ



この写真...





この人
知ってる？



.....



?



ぜんぜん
好きになれそうに
ない顔だと
思ったんだ！



まあな



その人

何か
まずいことでも
したんですか？



精神科病院に
ってこと
ですか？

それで
閉じこめ
られるような
羽目になったのさ



世間は心が
狭いものさ

『まずい』の
意味にもよるがね

たしかに晩年の
ルフェイばあさんは
かなりいいがわしい
人物ではあった

愚かなことを
したもんだ



ルフェイばあさんは
死ぬ前に
釈放されたんだが

わたしは彼女に
目通りがなかった

病床にあった
晩年には
ほとんど人を
近づけなかった

ごく少数の
一人なのだ

ルフェイ
ばあさんは

凡庸で
無知な人間を
きらうように
なった

わかるね

わたしも
同じだ

しかし
ルフェイばあさんと
わたしは
同好のよしみでな

死ぬ二三日前の
ことだった

ルフェイ
ばあさんは
わたしを呼んで

ばあさんの
家にある
古い机の
ところへ行って

秘密の
ひきだしをあけて
中にある小さな箱を
持ってくるように

…と言った





わたしは
指先のうずきで
直感した

その箱を
手にした
瞬間

ルフエイ
ばあさんは
その箱を
わたしに
渡して

自分が
死んだらすぐに

箱をけっして
開けることなく
これこれしかじかの
儀式をしたうえで
焼き捨てるように…
と約束させた

わたしは
その約束を
守らなかったがね

その箱には
たいへんな秘密が
隠されている
ということな



わかるかね
デイゴリー

わたしのよう
秘めたる叡智を
持ちあわせておる
人間は

世間一般の
楽しみごとに
無縁であると
同じく

世間一般の
決まりごとには
縛られないのだ

いいかね

わたしの
ような人間は

孤高なる運命を
さずけられて
おるのだ

…要するに

自分の望むものを
手に入れるためには

何をやってもいいと
思ってるんだな

もちろん
わたしは
長いあいだ
箱を開けは
しなかった



非常に危険なものが
はいつて
おるかもしれんと
わかっていたからだ

わたしの
名付け親は
きわめて
人間ばなれした
女性だったのでね

ほんとうの
ことを言うと

ルフエイばあさんは
この国で妖精の血を引く
最後の人間の一人
だったのだ



要するにだね
デイゴリー

おまえは
妖精の血を引く
名付け親を持つ

(おそらく)
最後の人間と
話をしておる

…という
ことだ

どうだ！

おまえが
年寄りに
なったころには
自慢の思い出話に
なるぞ

…その人は
悪い妖精だったに
ちがいない

それで
ポリーの
ことは？

おまえも
しつこいな！

なんで
そんなつまらん
ことばかり
聞きたがる！



それは非常に
古い箱であった



その時点で
すでに
わたしには

その箱が
ギリシア時代の
ものでもなく
古代エジプトの
ものでもなく

バビロニアや
ヒッタイトや
中国のものでも
ないことぐらいは
わかっていた

そのような国々より
はるかに時代を
さかのぼった
ものだったのだ

—ああ

ついに真実を
見つけた日こそは
記念すべき日で
あった



その箱は
アトランティスの
ものだった

失われし幻の
アトランティス島から
来たものだったのだよ！





その結果

箱の中身が
どのような
ものであるか
だいたい見当が
つくようになった

わたしは
いろいろなテストを
おこなって
可能性を絞っていった

その過程で
何人か邪悪な
変人どもと
交誼を結ぶことになり

じつに不愉快な
経験も
しなければ
ならなかった

そのせいで髪が
こんなに白くなって
しまったのだ

魔術師というものは
おいそれと
なれるものでは
ないからな

おかげで
からだまで
こわしたが
それは回復した

そしてついに

はつきりと
わかったのだ



アトランティスの
箱には

われわれの世界が
始まった
ばかりのころに

別の世界から
持ちこまれた

あるものが
はいつていたのだ

つづく